

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 77 (5) は, Review Article が 1 本, Regular Article が 4 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Review Article

Structural and functional features of treatment-resistant depression: A systematic review and exploratory coordinate-based meta-analysis of neuroimaging studies

A. Miola*, N. Meda, G. Perini and F. Sambataro

*1. Department of Neuroscience, University of Padova, Padova, Italy, 2. Padova Neuroscience Center, University of Padova, Padova, Italy, 3. Casa di Cura Parco dei Tigli, Padova, Italy

治療抵抗性うつ病の構造的および機能的特徴: 神経画像研究のシステムティックレビューと探索的座標ベースメタアナリシス

【目的】大うつ病性障害患者の 3 分の 1 は, 2 種類の抗うつ薬による適切な治療後も症状が有意に改善しない。治療抵抗性うつ病 (treatment-resistant depression: TRD) と呼ばれるこのよくみられる疾患は, 世界中で何百万人もの人々の生活の質に深刻な影響を及ぼし, 長期にわたる対人関係問題と社会的費用の原因となる。その疫学および臨床的関連性, ならびに TRD の神経生物学的基盤が治療感受性うつ病 (treatment-sensitive depression: TSD) と異なるかどうかについてのコンセンサスがほとんどないことを考慮して, われわれは TRD の収束した形態計測的・機能的神経画像相関因子を浮き彫りにすることを試みた。【方法】TSD および健康対照 (healthy controls: HC) と比較した TRD の構造的および安静時機能的神経画像検査に関

する公開文献のシステムティックレビューを行い, 各検査法, および多検査法 (「all-effects」) について, 個別に有意な結果の探索的座標ベースメタアナリシス (coordinate-based meta-analyses: CBMA) を実施した。CBMA はグループコントラストの各方向および両方向の組み合わせについても実施した。【結果】最初の 1,929 件の研究のうち, 参加者 555 名 (TRD 患者 189 名, TSD 患者 156 名, および HC 210 名) を対象とした 8 件のみを組み入れた。All-effects CBMA において, 中心前回/上前頭回は, TRD と HC との間で有意差を示した。機能的および構造的イメージングのメタアナリシスからは, 統計的に有意な結果は得られなかった。固有活性変化の辛うじて有意なクラスターが, 小脳/橋において TRD と HC との間に認められた。【結論】前頭葉, 小脳, および脳幹の機能が, TRD の病態生理に関与している可能性がある。しかし, (数少ない) 公開文献のデザインと不均質性から, 結果を一般化することはできない。

Regular Article

Effects of Japanese policies and novel hypnotics on long-term prescriptions of hypnotics

M. Takeshima*, K. Yoshizawa, M. Enomoto, M. Ogasawara, M. Kudo, Y. Itoh, N. Ayabe, Y. Takaesu and K. Mishima

*Department of Neuropsychiatry, Akita University Graduate School of Medicine, Akita, Japan

睡眠薬長期処方に対する日本の政策と新規睡眠薬の効果

【目的】本研究は, 睡眠薬の適正使用を目的とした日本の政策と新規催眠薬 (メラトニン受容体作動薬, オレキシン受容体拮抗薬 (orexin receptor antagonist: ORA) など) の睡眠薬の長

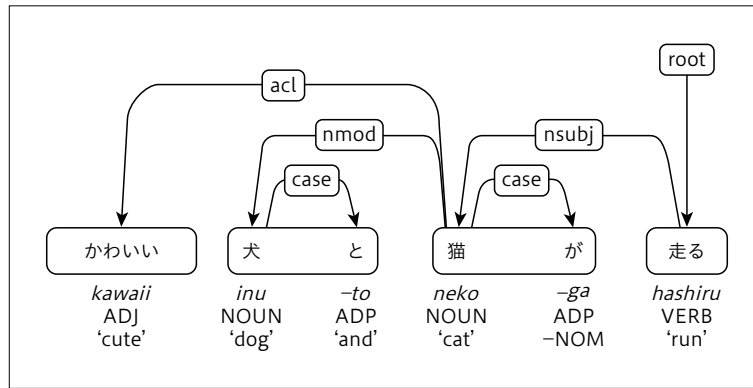


Figure 1 Japanese tagging for Universal Dependencies. ADJ : adjective, ADP : adposition, NOUN : noun, VERB : verb, acl : clausal modifier of noun (adjectival clause), case : case marking, nmod : nominal modifier, nsubj : nominal subject, root : root.

(出典：同論文, p.274)

期処方に対する効果を検討することを目的とした。【方法】本研究は、大規模なレセプトデータベースを用いた後方視的研究である。2005年4月から2021年3月の間に1回以上睡眠薬を処方された加入者のうち、3つの時期（第1期：2012年4月～2013年3月、第2期：2016年4月～2017年3月、第3期：2018年4月～2019年3月）にレセプトデータベースに登録されてからはじめて睡眠薬を処方された者を対象とした。これらの期間は2014年および2018年の診療報酬改定（2014年は3種類以上の睡眠薬の多剤併用、2018年はベンゾジアゼピン受容体作動薬の長期処方（12ヵ月超））のタイミングに基づいて設定された。12ヵ月を超える睡眠薬の長期処方を調査し、睡眠薬の短期処方に関連する要因も調べた。【結果】合計186,535名の患者が新たに睡眠薬を処方された。睡眠薬の平均処方期間は2.9ヵ月であり、9.3%の参加者は12ヵ月間を通して睡眠薬を処方されていた。睡眠薬がはじめて処方された時期は睡眠薬の短期処方とは関連がなかった。はじめて睡眠薬を処方された月におけるORAの使用は睡眠薬の短期処方と関連していたが〔調整ハザード比1.077（95%信頼区間1.035～1.120）、 $P < 0.001$ 〕、メラトニン受容体作動薬の使用は関連していなかった。【結論】日本の政策は、睡眠薬の長期処方に対して統計的に有意な影響を与えなかった。本研究は、不眠症患者に対してORAで治療を開始することが睡眠薬の長期処方を防ぐための戦略候補となることを示唆したが、結論を出すにはさらなる研究が必要である。

Regular Article

Language patterns in Japanese patients with Alzheimer disease : A machine learning approach

Y. Momota*, K. Liang, T. Horigome, M. Kitazawa, Y. Eguchi, A. Takamiya, A. Goto, M. Mimura and T. Kishimoto

*Department of Neuropsychiatry, Keio University School of Medicine, Tokyo, Japan

アルツハイマー型認知症患者の言語パターンの研究：機械学習によるアプローチ

【目的】著者らは、自然言語処理および機械学習を用いて、日本人のアルツハイマー病（Alzheimer disease : AD）患者の言語能力を評価する客観的指標となる、疾患に関連した言語パターンを調べた。その背景として先行研究の多くは欧米言語による大規模データセットを使用している。【方法】著者らは、50歳以上のAD患者42名および健常対照者52名から276個の音声サンプルを取得した。Pythonで利用できる自然言語処理ライブラリのspaCy、および、多言語に対応した構文解析の開発を進めるために設計されたUniversal Dependenciesに基づいて日本語の構文解析を行うアドオンライブラリであるGiNZAが用いられた。分類アルゴリズムにはeXtreme Gradient Boostingを使用した。品詞および依存関係（係り受け関係）の単位ごとにタグが付与され、タグの出現頻度や、タグからタグへの遷移頻度などの特徴量を生成するために計算された。各特徴の重要度は100回の繰り返しランダムサブサンプリング検証において算出され、平均値が示された。【結果】モデルの精度は0.84（SD

=0.06), 曲線下面積 (area under the curve : AUC) は 0.90 (SD=0.03) であった。予測に重要であった上位 10 個の特徴のうち 7 個は品詞に関連し, 残りの 3 個は依存関係に関連していた。箱ひげ図の分析では, 内容語に関連する特徴の出現率は患者群で低く, 発話の停滞に関連する特徴の出現率は患者群で高いことが示された。【結論】本研究は AD の予測に有望な水準の精度を示すとともに, AD の発話特徴として知られる「空疎な発話」における語彙および意味の障害と一致する言語パターンを見いだした。

Regular Article

Sex differences in neurodevelopmental trajectories in children with different levels of autistic traits

T. Nishimura*, N. Takahashi, A. Okumura, T. Harada, T. Iwabuchi, C. Nakayasu, M. S. Rahman, S. Uchiyama, M. Wakuta, Y. Nomura, N. Takei, A. Senju and K. J. Tsuchiya

*1. Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine, Hamamatsu, Japan, 2. United Graduate School of Child Development, Hamamatsu University School of Medicine, Hamamatsu, Japan

異なるレベルの自閉特性をもつ子どもにおける神経発達の軌跡の性差

【目的】自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorders : ASD) の早期徴候について, 現在の診断基準では見過ごされている可能性があるものも含め, 女性ではほとんど知られていない。われわれは, 異なるレベルの自閉特性をもつ子どもにおいて, 認知・運動機能および適応行動の軌跡の性差を縦断的に調査した。【方法】浜松母と子の出生コホート研究 (Hamamatsu Birth Cohort for Mothers and Children : HBC Study) に参加した子ども 824 名を対象とし, SRS-2 対人応答性尺度に基づいて自閉特性を低い群, 中等度の群, 高い群の 3 群に分類した。認知・運動機能は, Mullen Scales of Early Learning を用いて 0.5 歳から 3.5 歳までの 7 時点で測定した。適応行動は Vineland-II 適応行動尺度を用いて 2.7 歳から 9 歳までの 5 時点で測定した。潜在成長曲線モデルを用いて軌跡を描出した。【結果】自閉特性の高い群では性別特異的な軌跡が観察され, 男性においてのみ, 2 歳頃に表出言語が一時的に低下し, その後わずかに改善する軌跡がみられた。男性では適応行動のコミュニケーション領域においても, 3 歳頃にわずかな改善がみられたが, その後は緩やかな低下傾向を示した。自閉特性が高い群の女性では, 3 歳以前

には明確な徴候はみられなかったが, 3.5 歳以降に適応行動のコミュニケーション領域で低下傾向がみられた。【結論】臨床診断の有無によらず, 同性と比較して高い自閉特性をもつ女性と男性では, 幼児期および小児期早期において, 特定の神経発達領域で異なる表現型をもっている可能性がある。

Regular Article

Cause-specific mortality after discharge from inpatient psychiatric care in Taiwan : A national matched cohort study

C-Y. Hsu*, S-S. Chang, M. Large, C-H. Chang and M-C. M. Tseng

*1. Department of Psychiatry, Wan Fang Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan, 2. Psychiatric Research Center, Wan Fang Hospital, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan, 3. Department of Psychiatry, School of Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan

台湾における入院精神科ケアから退院した後の死因別死亡率 : 全国マッチングコホート研究

【目的】入院精神科サービスから退院した患者の死因別死亡率の絶対リスクおよび相対リスクの推移を調査することを目的とした。【方法】全国死因データファイルにリンクされた台湾国民健康保険データベースのデータを使用して, 全国マッチングコホート研究 (2002~2013) を実施した。以前に精神科に入院したことの無い, 入院精神科ケアから退院した患者を, 1 名ずつ性別と年齢に基づいて 20 名の比較対照者と一致させた。死因別死亡率, 率の差, および相対リスク (ハザード比 (hazard ratios : HRs)) を, 退院後フォローアップ期間中 6 時点で計算した。累積死亡率は 5 年フォローアップ時で評価した。【結果】全死因死亡リスクは, 患者 (n=158,065) のほうが比較対照者 (n=3,161,300) と比較して増加していた。死亡率の差は自然死のほうが大きかったが, HRs は不自然死のほうが高かった。退院後 1 年以内の死因トップは自殺だったが, 2 年目以降の死因トップは循環器・呼吸器疾患だった。全死因 (殺人を除く) 死亡率および HRs は, 最初の 3 ヶ月間が最も高かった。不自然死のリスク上昇は退院後急速に低下したが, 長期的に高いままだった。対照的に, 自然死のリスク上昇の経時的変化はより小さかった。患者の約 8 分の 1 (12.9%, 95% 信頼区間 12.7~13.7%) がフォローアップ開始から 5 年以内に死亡した。【結論】精神疾患患者の特に退院から 3 ヶ月間の超過死亡率を減らすには, 統合された身体的および精神的医療が必要である。

コンビニエンスストアのコピー機のガラス面に、自分の好きなシールなどをおいたうえで、おもむろに自分の顔を押し当てて、印刷ボタンを押す。それが井口の制作方法である。興味深いのは、時に、一緒にいる人の顔や手などを引き込むこともある点だ（左の作品）。つまり、彼の作品は、単なる自己表現ではない。また、印刷の際に選んでいるモードが、白黒でもフルカラーでもなくて、例えばイエローとマゼンダの2色カラー（右の作品）やシアンモノカラー（左の作品）のように、印刷の色を選びつつ限定している点も興味深い。そうすることで、単なる現実のコピーとなるのではなく、コピー機の機能を使った独自の表現になっている。コピー機の商用が広まった1960年代、気軽に複写、印刷ができる点を活かして、「ゼロックスアート」あるいは「ゼログラフィー」というジャンルが生まれたが、井口の作品は、その系譜にあるとみなすことができる。

ただ、井口にとっての「制作」はコピーで終了するのではない。彼はそれを自宅に持ち帰り、部分を切り抜き、それらを張り直して、腕章型のコラージュをつくることがある。そしてそれを翌日、自分が通う施設の誰かにあげる。この一連の行為が、彼にとっては「制作」であるのかもしれない。また、他者の協力が介在している点も見逃せない。腕章を作る際に実際に手を動かすのは母親のようだし、コンビニのスタッフも、井口が帰った後に、ガラス面についた顔の脂を拭き取るなどしている。さまざまな人達の理解と協力があって、井口の制作は継続しているのである。

保坂健二郎（滋賀県立美術館）

タイトル：COPY

作者：井口直人（IGUCHI Naoto）

技法・素材：2色刷りコピー・紙、インク

制作年：2021年

サイズ：各257×364mm

写真提供：さふらん生活園

